

●特集● 第68回大会レポート (於：椋山女学園大学)

「保育文化の創造」——今回の特集は、成功裡に終わった第68回大会報告である。大会実行委員長の感謝の言葉とともに、5名のレポーターの記事が掲載されている。「新たな保育の創造をめぐる国際動向」「質の高い保育をどう実現するか」「保育者養成をめぐる今日的課題」「口頭発表」「ビデオ実践研究発表」など、各レポーターが記した渾身のルポルタージュ記事を通して、文化的営みとしての保育や、その保育の未来を創造するための課題などについて、自分たちの問題関心と引き付けながら考えてみたい。

第68回大会を終えて

第68回大会実行委員長 大森 隆子

2015年5月9日・10日の両日、椋山女学園大学星が丘キャンパスを会場として開催された日本保育学会第68回大会（中部ブロック主催）は、1,000件を超す研究発表と3,000人を上回る参加者を得て無事終了した。この2年半、実行委員長として常に頭の中を占めていた大会運営が「終わった」と自認した一瞬、頭の中が真っ白かつ何とも軽やかな身体になった。

中部ブロック理事からの会場校依頼を椋山女学園大学教育学部が受け、立ち上げた中堅・若手数人の準備委員（その後の運営委員）を中心に、一步一步進めて行った。最後の1年は嵐のような毎日であった。

大会テーマは、準備委員の議論、実行委員会の議を経て「保育文化の創造」とした。大会記念講演の講演者に関しては早々に交渉を開始した。2014年年明けの実行委員会において、大まかな大会運営の組織と概要を提案すると同時に実行委員会企画を募った。総意を得て実現した企画はいずれも時宜に適い、国際色豊かで好評かつ参加者の多さも申し分ない成果を出すことができたと考える。

運営面においては、地の利を生かし星が丘キャンパス一箇所ですべてを完結させることとした。口頭発表、ポスター発表、ビデオ実践研究発表、自主シンポジウムあわせて1,000件余りのプログラム編成と座長の決

定、会場設営、備品配置他、誘導表示や資料の作成など、可能な限りローコストを追求し、外注せず徹底的に学内のマンパワーを中心として対応した。それもこれも、予算収入は参加者の参加費を原資とするため、あらかじめ見込める予約参加者数を除いて、当日参加者数が鍵をにぎる。正直予想のつかないこの人数を基に収支の均衡を目指すのは難題である。

結果的に両日とも天候・地の利に恵まれたためか、あるいは企画・広報の効果であろうか、想定以上の参加者を迎え、キャンパスは来場者であふれ、地下鉄最寄り駅からの通りも人波で大いに賑わいを見せた。

大会が遂行できたのは、偏に中部ブロックの理事・評議員、学会員を中心とする実行委員・協力委員、学園長・学長をはじめとする職員の方々の惜みない協力、教育学部教員の尽力と、何といても170人余の学生達（教育学部4年生、3年生、大学院生）の助力の賜物である。女子大ゆえ、力仕事もすべて女子力で遂行した。共学志向が強まる世の中、女子大の利点や底力を見せた大会ともいえようか。

5月の爽やかな風の中で残務作業に費やす日々、これだけ大きな規模となった大会を持ち回りで運営するには、何より思い切った改善・改革が待たれる。紙媒体の発表要旨集や参加申し込みなどに関しては、今大会から廃止され一歩前に進んだが、この他大会の運営全体に関わる部分については幾つかの課題が残るように思う。それらは今後の叡智に期待しつつ、本実行委員会の委員長としての責務を終えることとしたい。



実行委員会企画特別フォーラム 日本のこどもの中に見る“新たな保育の創造” —生活というアート：オーストラリアとスウェーデン、そして日本—

船田 鈴子

「現代という時代において、そこに生きる子どもたちの生活・風土・文化に立脚した保育をどう創造するか」に視点をあて、オーストラリアとスウェーデン、日本のパネラーの先生方の具体的事例の実践報告があり、いつの間にか溢れるばかりに人で一杯になった会場全体で「新たな保育の創造」を共に学び合うことができた。

初めに、磯部錦司氏（梶山女学園大学）から本企画の趣旨が説明された。今、世界の保育は生活基盤型保育に向いていると感じられるが、これは子どもの興味や関心、言葉や姿から保育を始め、子どもを主体にした生活や遊びを展開させ、豊かな生活を構築していくことである。生きる営みとして保育を考えた時、生活というアートそのものの概念の変容が見られないと、新たな保育の創造に辿り着かないのではないかと述べられた。

パネラーの一人目はオーストラリアのRuth Mules（ルース・ミュールズ）氏で、グローブ・プリスクールの日常生活のクリエイティブアートに焦点をあて報告された。子どもたちと自然、生、アートを取り入れた表現の実例を中心に探りながら、プリスクールの信念をもとに、子ども一人ひとりが自然の中でアートを見つけ、自然とぶつかり合いながら自分の持っている力を豊かにし、創造力を促していくことや、アートを教育の中心に据え、子どもの主体性や、学び、権利を尊重しながら育てていくことの重要性を示唆された。また、このような豊かな生活の経験は、子どもが良い生活者として、活動を生み出し、多様な物や違いを受け入れ、偏見に挑戦する力に繋がり、平和な社会をつくる支えとなると述べられた。

続いてスウェーデンのNiklas Pramling（ニクラス・プラムリング）氏より、自国の保育の今後の方向性と課題について報告があった。保育の本質を考えていくとき、アートに関するカリキュラムの中に子どもの主体的なアプローチを大切に、発達を断片的に見るのではなく全体的に見ることが重要であると語られていると話された。幼児学校におけるアートの役割は、学びと創造性に満ちた、個人として肯定的な自分を描けるという役割を果たしていくことと、子ども達が自分自身で考え、行動する、学ぶ機会を称賛しなければならないことであると強調された。

日本からは、福田泰雅氏（赤碕保育園）が雄大な自

然に囲まれた保育園を紹介された。そこは、生活と造形表現に視点をあて、子どもたちが自由に環境を使って創造しながら主体的に学んでいる様子がうかがえた。ツリーハウス作りを通して、子どもの発想を大人が受け止めたことで子どもの生活が豊かになり、一人ひとりが自分らしくしたいことをする。その中から一人ひとりの個が確立し社会化していく様子が見られた。また、妹尾正教氏（多摩川保育園）は子どもについてもっと根源的なところで捉え直し、子どもを一人の対等な人間として見ることの大切さを問われ会の結びとなった。

●Profile

船田 鈴子（ふなだ れいこ）
愛国学園保育専門学校 副校長
幼児理解のための実践的方法論、保育学生のストレス管理や保育職への動機づけのための適切な実習事前事後指導のあり方について研究。

課題研究委員会シンポジウム 質の高い保育は実現できるのか

—今、遊びを通した保育が問われている—

室井 眞紀子

現場で保育をしている私にとって「今、遊びを通した保育が問われている」という本シンポジウムは大変興味深いものであった。質の高い保育を行うためには何が必要か、自身の保育実践のヒントとなるものを得たいと思い、参加をした。

当日は立ち見が出るほどの盛況であり、このテーマへの関心の高さがうかがえた。話題提供者として登壇された4名の先生方からは、質の高い保育を実施するための課題がそれぞれの立場から挙げられた。

まず、猪熊弘子氏（東京都市大学）は、社会経済状況に影響された保育現場の現状として、①遊びをよりよく獲得するための場所である保育園や幼稚園に入れない、②保育の質より量を優先した結果、考えられないような環境の施設もでてきた、③「預かってくれればどこでもいい」と親たちの保育に対する期待が薄れている、を挙げた。それらと関連して、保護者が考える保育の質と保育者が定義する保育の質の捉えに違いを挙げ、それをどう是正するか、どう乗り越えていくかを課題とした。

若月芳浩氏（玉川大学）からは、園長であるご自身の経験を交えながら、遊びの質的向上に向けて保育を変えていくことの難しさに触れ、遊びの質を深めるための6つの提案があった。そのうちの1つとして各々のこれまでの園文化について見直しの必要性を挙げ、質

向上のためには、常に保育を見直し、園の固定化された文化を壊し作り直していく必要があると述べた。

児嶋雅典氏（松山東雲短期大学）からは、養成校の立場から、子どもの発達を理解し、援助することが保育者の専門性であるが、保育者は子どもの発達を保育の中で捉えきれていないのではないか、という投げかけがあった。そこで、「子どもの発達過程の分かる保育者の養成」を養成校の課題として挙げた。

北野幸子氏（神戸大学大学院）からは、研究者としての視点から世界の研究動向を交えて保育の質に関する話題提供があった。そして、保育の質の最低基準を確保するための課題として、①「評価（数値化）」「監査」の導入の必要性、②遊びの中の学びを保育者により可視化する必要性、③保育実践を言語化し、発信していく必要性、を挙げた。

最後に、指定討論者の諏訪きぬ氏（さやま保育サポートの会保育研究所）は、4氏の提言を踏まえ、現在の日本における「長時間保育」の問題を取り上げた。生活は子どもをベースとして、その上に遊びがあり、貧しい生活環境の中から豊かな遊びは生まれないことから、遊びの質を考える前に「ライフ・ワーク・バランス」という視点で親子の生活を見直す必要性を指摘した。そのために、再度倉橋の生活保育論を見直し、「生活と遊びの関係」を捉えるべきであると提案した。また、保育者と子どもの関係だけを考えているのは保育の質は向上しないため、今後は社会・文化的背景を含めた構図で研究を行っていくことが必要であると述べた。

時間の制約で、参加者と討議ができなかったのは残念であった。しかし、立場の異なる4氏から共通して、保育の質の向上に向けて何とかしようという熱い思いが伝わってきた。

それぞれの先生方が示された課題を持ち帰って、もう一度生活と遊びの関係を考え、質の高い保育の実現に向けて、自分自身の保育実践を見直したいと思う。

●Profile

室井 眞紀子（むろい まきこ）
学校法人吉田学園すみれ幼稚園 幼稚園教諭（現在4歳児担任）
遊びや生活を通した子どもの学びや発達をどのように理解し、評価していくかについて関心がある。

自主シンポジウムJ17

保育における感情労働と養成校の課題②

—子どもの主体的な遊びにかかわる力を育む保育者養成とは—

傳馬 淳一郎

保育者養成に関わる課題について感情労働を切り口として考えていく試みであり、昨年から続いて2回目の自主シンポジウムであった。感情労働とは、社会学者のHochschild（ホックシールド）が提唱した概念で、感情ルール（職務上適切とされる感情の内容や表し方）に合わせて、働き手が自分の感情を制御・管理することである。保育者であれば、「子どもたちの前では笑顔で」といったことが、その一つとされる。今回の自主シンポジウムでは、主に実習生が遊びにかかわる場面を取り上げていた。

はじめに、前田武司氏（額小鳩保育園）より「保育現場で育む子どもの遊びにかかわる力の養成」として、実習生を受け入れる現場からの話題提供があった。実習とは「未来の保育者になるための大きな経験」であるが、養成校や個人によって、意欲や学習面、コミュニケーション力などの様々な格差がみられる。また、学生の自己肯定感の低さから、実習先の指導や子どもとの関係の中でも課題がみられることがある。そうした状況を背景に現場は、「実習生は保育を上手くできなくて当たり前」という認識を持つことが強調された。一方で、養成校教員も実習先との関係からプレッシャーを感じ（感情労働しながら）、さらに実習生にプレッシャーを与えていると感じる場合もあると述べる。実習は、学生の人生を左右する大事なものとして、現場と養成校は連携していくことが大切と述べた。

次に高橋真由美氏（藤女子大学）より「保育学生は子どもの遊びにかかわる際に何を難しいと思うのか」について、話題提供があった。実習生の振り返りには「複数の子ども」とのかかわりに関する事例が多いこと、また、良いかかわりとは「遊びを発展させる」と捉えている学生が多いことが報告された。保育学生は、実習の中でクラスをまとめ「遊びを発展させることが保育である」とのイメージがあるのかもしれない。こうした学生の姿は、学外実習に向けての指導が、「指導案を作成し設定保育を行うことに重点がおかれていること」によるものではないかと投げかける。つまり、学生の中で指導案に沿って実習できたか否かが実習の評価と結びつくと感じ、「～しなければ」との思いを強める。結果として、前田氏も指摘する「遊びの指導が『指示・命令・禁止』の目立つ実習をしてしまい、そうした保育イメージが遊びにかかわる際の弊害になる可能性がある。

その解決の糸口となる実践が小川房子氏（川口短期大学）の話題提供であった。小川氏は、学生が子どもとのかかわりの中で「遊んであげなければ」との思いが強い時、一方通行のかかわりになりがちであると述べる。実際に学生が子どもと感情を「送受」している実践を報告したうえで、学生が「～しなければ」という気持ちを取り払い、夢中で遊ぶことで自分の感情に目を向け、子どもの感情を受け止めている姿を示した。

最後に指定討論の砂上史子氏（千葉大学）より、保育者が子どもの遊びにかかわる難しさとして、教育的ねらいと遊びの楽しさ（子どもの感情）の両立を要求される点などが整理され、フロアからも活発に意見が交わされた。当たり前に行っている保育者養成を改めて考える機会となった。

●Profile

傳馬 淳一郎（でんま じゅんいちろう）
名寄市立大学短期大学部 講師
実習指導等を担当しながら、離職保育者・保育者養成に関する研究をしている。

口頭発表 C6

保育方法（保育方法論・保育形態・幼児理解）2

大井 美緒

第68回大会では多数の発表がなされたが、ここでは、5月10日の口頭発表C6での発表内容と討論の概要について報告をしていく。

保育現場において、「子どもの主体性」「保育の質」ということは、常に課題として挙げられる。本口頭発表は、「子どもたちが主体的にのびのびと過ごしていくためには」という問いを、「子ども理解」に重点を置き、具体的な保育場面の観察や記録、園内研修から捉え発表がなされていたように思う。

宍戸良子氏（大阪国際大学短期大学部）らは、ニュージージーランド発祥のラーニングストーリーの有用性に着目し、記録を通して保育者同士だけでなく、保護者とも対話をしていくことが、子ども理解には重要であると考察されていた。阿部美穂子氏（富山大学）らは、子ども一人ひとりの課題を分析していくために、片付けなどの生活面と遊びの場面において、それぞれ独自のチェック項目を作成し、それらは主体的な子どもの姿を実現するために有効な支援方法として考察していた。高辻千恵氏（東京家政大学）らは、0～2歳児クラスの保育状況に焦点を当て、空間も含めた保育環境の設定について検討をしていた。山本恵莉子氏（たづは

ら保育園）は、園内研修からの分析を通して、新人保育者は様々な場面においての子どもとのかかわりについて、どのようにかかわっていけばいいのか、方法ばかりを考えるということを報告した。

討論では、「子どもにとって」「保育者にとって」それぞれの立場から、どのように保育の質や子ども理解を深めていくべきかの意見が活発になされた。

子ども理解は、保育をしていく上で欠かせず、そのアプローチの仕方は多様である。また、子どもへのかかわり方は、直接的なものから環境設定など間接的なものまでである。例え同じ内容であっても、子どもによって対応の仕方は違ってくるため、万能の答えはない。このことは、保育をしていく上での難しさであり、興味深い点とも言える。しかし、日々の保育の中では、難しさだけが取り上げられるであろう。その難しさが興味深いものへと変容していくためには、日常の保育の語りや記録を通して、保育者同士また自分自身と対話をしていくことではないだろうか。子どもとのかかわりや記録も含め「保育って面白い」「子どもって面白い」と感じることができる対話は、保育の質や子ども理解を深めていくことにつながっていくことを本発表、討論を通して改めて感じた。

記録や対話というと、“保育者らしい”考察や発言をしなくてはとってしまうところがあるだろう。確かに、考察していくことは大切であるが、実際にはその時点では子どもの気持ちを理解できないこともある。このような思いは、共感し合えることが多いのではないだろうか。それぞれの保育者が素直に自分の思いを表現していける環境を整えていくことも重要であると感じた。

発表者の方々から多くの刺激をもらっただけでなく、時間が足りなくなるほどの討論からも多くのことを学ぶことができ、大変有意義な時間となった。

●Profile

大井 美緒（おおい みお）
星美学園短期大学幼児保育学科 講師
これまで実習生を受け入れる立場であったが、現在は幼稚園や保育所に学生を送り出す立場となった。そのため、今は受け入れる側の思いも含め、実習の事前事後の指導の在り方に関心がある。

ビデオ実践研究発表 VI 保育内容Ⅱ（健康・人間関係・環境・言葉・表現）

清水 憲志

本セッションは他とは異なり、ビデオを用いた発表である。そのため、発表者の分析、考察のみならず、その対象者の姿が見える発表であった。ビデオ実践発表VIでは、「3歳児における絵本の読みあい」、「幼児期における望ましい英語指導とは～ETMの実践を通して～」、「2歳児における絵本の読みあい」、「手作り楽器による音楽活動の一試案」という4つの発表があった。

「3歳児における絵本の読みあい」では、絵本を用いた日々の活動が細やかに示されていた。絵本を計画的に活用するために、年度初めに絵本も含めた年案が作成され、保育者が緻密なねらいをもっている様子が伝わってきた。綿密なねらい故に、子ども達は日々の活動を通し、絵本の世界観が身近なものに置き換えられ、多様な経験を生み出し、その結果が、ビデオの中の表情豊かな姿として映し出されていたと感じられた。また、“読みあい”について、“読み聞かせ”という言葉が保育者から子どもへ“聞かせる”といった一方的な活動という印象を受けることから、相互作用により展開する読み聞かせの活動であることを踏まえ、“読みあう”という言葉で表現していた。

「幼児期における望ましい英語指導とは～ETMの実践を通して～」では、歌遊びを通しての活動の良さが語られており、ハンドサイン等も用いているため、発表者は遊びを通じた人格形成につながっていると述べていた。

「2歳児における絵本の読みあい」では、3歳児とは違った姿だが、絵本の世界観を2歳児なりに受け止め、日々の園生活の中で表現する姿が見られた。絵本の読みあいの中で、自然と子どもが口ずさみ、その蓄積が断片的な姿から連続的な遊びへと移行する姿があった。

「手作り楽器による音楽活動の一試案」では、保育者養成校での実践が映し出されており、瓢箪を用いた楽器作りであった。同じ瓢箪を用いた楽器でも学生の数だけ楽器の形が違い、その演奏の仕方によっても音は違った。その演奏方法は、叩く、振る、落とす等であり、学生達が思い思いに表現し、メロディーを重ね合わせ一つの曲として奏でられていた。

今回参加したセッションの最大の特徴は実践の映像をその場で見るができるという点である。研究発表において議論を深めるためには、発表内容を十分に

理解し、様々な知見を踏まえる必要があるが、通常の口頭発表ではしばしば難しさを感じる。しかしながら、調査対象者である子どもや学生が参加者の前に映し出され、参加者は全てではないが、ありのままの姿を観ることが出来る。それにより、発表内容を参加者は自分なりの感性で紐解いたり、すぐに実践に取り入れたりすることもできると考えられる。

研究においても読み聞かせ同様に一方的なものになってはならず、参加者が積極的に参加することが重要であり、そうすることで相互作用が生まれ、有益な議論が展開されると思われる。そのためには、発表者は誰が見ても分かるようにする必要がある。その点から、対象者の生き生きとした姿を観ることでの出来る本セッションは、参加しやすく心惹かれるものであったのではないかと思う。

●Profile

清水 憲志（しみず けんじ）
姫路市立手柄保育所 保育士
大学院にておやじの会について研究し、以降全国のおやじの会と交流を深めながら、フィールド調査などを行っている。

◆名簿作成について◆

返信期日をお守りください

同封の要領にしたがって、個人データを修正し、返信用封筒に入れ、2015年9月30日までにご返送ください。訂正の無い場合も必ずご返送ください。

名簿には、2015年9月30日までに2015年度学会費を納入された会員が掲載されます。

10月1日以降に納入された方は、名簿に掲載されませんのでご注意ください。

なお、この名簿は役員選挙の選挙人名簿となります。名簿に掲載されていない方は2016年1月の役員選挙の権利がありませんのでご注意ください。

◆役員選挙について◆

2016年は、一般社団法人日本保育学会役員選挙の年です。2015年9月30日までに2015年度学会費を納入された方には、2015年12月に選挙人名簿・2016年1月に投票用紙が送られます。

会員の皆様には、期限までに年度学会費を納入の上、ぜひ投票をお願いいたします。